

歴史総合・日本史探究

今回の名大進学模試の歴史総合・日本史探究は、全体として 2026 年度名古屋大学の出題傾向を強く意識した構成である。多くの受験者の答案を分析したところ、論述問題における条件の読み飛ばしや、文化史・史料読解といった細かい知識の定着度に差が出る結果となった。

問題Ⅰの歴史総合の問題を除くと、2～3 行の論述問題が多く、限られた字数制限の中で多くの条件を満たす論述が求められる。そのため、単なる歴史用語の暗記にとどまらず、「原因・対応・結果」といった歴史の因果関係を論理的に構成する力が必要である。

また、図版や史料を用いた問題が中心となっており、資料集を活用した多角的な学習や復習が不可欠である。通史の完成を急ぐとともに、既習分野については教科書や資料集を繰り返し見直し、知識の精度を高めてほしい。

問題Ⅰ＜日清戦争前後の朝鮮半島の情勢＞

2025 年度以降、問題Ⅰは「歴史総合・日本史探究」と「歴史総合・世界史探究」の共通問題が、出題されている。

2025 年度は、手塚治虫の漫画『一輝まんだら』を題材に論述する問題、2026 年度は、ビゴーの風刺画を参考にしながら「イギリスから見て日露戦争がどのような戦争だったか」を論述する問題であった。

本問は、これらに共通するテーマである

- ・近代の戦争に関連した設問（歴史総合分野）
- ・漫画や風刺画を題材としている

という点を踏まえて作問している。

本問における風刺画は、ビゴーの『魚釣り遊び』(Une partie de pêche)で、日清戦争前後の朝鮮半島の情勢を描いたものとして知られているが、風刺画の中でかなり有名な部類に入り、内容も捉えやすい。また、指定語句（義和団戦争・中国分割・下関条約・戊戌の変法）は教科書レベルであり、風刺画を参考にすれば、論述の方向性は明確で、比較的解きやすい問題と言える。それにも関わらず、解答の途中で終わっている答案も多く見受けられたのは、論述問題に対する準備不足である。自分の答案を確認し、それに該当する受験生は猛省してもらいたい。

名大の「地歴」の試験時間が 90 分であることから、問題Ⅰの「長文論述」に充てられる時間は、長くても 20～25 分程度である。したがって「20 分以内」という制限の中で練習し、さらに、独りよがりの答案にならないよう、添削してもらうことも必要である。

問題Ⅱ＜原始・古代における水稻耕作の普及とその影響＞

本問は、原始から古代にかけての社会構造の変化をテーマとした出題であった。

問1では縄文時代の道具の用途が問われたが、「見た目の特徴」ではなく「用途」を的確に述べる必要がある。問1のような考古学資料を用いた論述は名古屋大学入試では頻出である。

問2の遺跡名については、菜畑遺跡（佐賀県）や板付遺跡（福岡県）といった基礎知識に加え、「普及しなかった地域」まで正確に把握できていたかが分かれ目となった。また、「普及しなかった地域」に関しては2022年度の入試でも問われた内容である。

問5の仏像に関する問題は、名古屋大学入試で頻出の文化史分野であり、2018年度の入試にも法隆寺金堂釈迦三尊像に関する問題が出題された。作者である鞍作鳥（止利仏師）は答えられた受験生が多かったものの、「北魏様式」という様式名まで答えられた受験生は限られていた。

問6の後期古墳（群集墳）の背景については、ヤマト政権の政策意図である有力農民層の組み込みまで踏み込んだ記述が求められており、単にヤマト政権の支配が拡大したという説明に終わらない深い理解が必要である。また、群集墳が有力農民層の墳墓であるという理解ができていない答案が多かった。

問題Ⅲ＜六国史と律令国家の変容＞

古代の基本史料である「六国史」を題材に、当時の政治・社会情勢を問う構成であった。

問2の土地制度の変遷（三世一身法から墾田永年私財法へ）については、「なぜ新法が必要になったのか」という理由である土地の再荒廃の防止を明記できたかがポイントである。三世一身法や墾田永年私財法に見られるような律令制度による土地管理の限界に関する問題は、名古屋大学に限らず他大学でも頻出のテーマであり、確実に得点したい問題である。

問4では、藤原良房が「人臣初の正式な摂政」となった経緯が問われた。貞観8年（866年）という年代から応天門の変を導き出し、摂政の職務内容まで論理的に説明できた解答は評価できる。

問5の三善清行『意見封事十二箇条』については、史料から読み取れる「偽籍の横行」と、その提出先である醍醐天皇の名を正しく組み合わせる必要があった。

問題Ⅳ＜中世の政治と文化―『梅松論』を題材に―＞

『梅松論』の史料を用い、保元の乱から建武の新政、南北朝文化までを幅広く問う問題であった。2026年度入試の『太平記』を題材にした問題を強く意識した出題である。

問1の後醍醐天皇の配流については、討幕計画の露見だけではなく、持明院統の光厳天皇の即位という政治的背景にも言及できているかが重要である。

問2の保元の乱については、天皇方に味方した藤原氏・平氏・源氏の人名を挙げながら説明することが求められており、人物相関を整理できているかが重要である。人物名を挙げられるかどうかで差が出た問題である。また、平治の乱や応仁の乱など、関わった人物が多い戦いについては整理しておきたい。

問3の役所名（記録所・雑訴決断所）については、指定語句である「後三条天皇」や「引付」をヒントに、それぞれの職務を混同せずに記述できたかが問われた。

文化史を扱った問5では、連歌や闘茶が「寄合」という形式を通じて身分を越えて広がったという、中世文化の特徴を整理しておきたい。

問題Ⅴ＜近世の一揆と幕政改革＞

近世に起こった様々な一揆を軸に、藩政改革や幕府の政策を問う難度の高い設問であった。

問 1 は代表越訴型一揆について説明する問題であったが、越訴についての理解が不十分な答案が多かった。一方で、代表者が死後に地域の人々からどのように扱われたかについては記述できていた受験生が多かった。江戸時代を通じて行われた一揆の形態の違いについては、整理が必要である。

問 2 の長州藩の改革は、江戸後期の藩政改革として頻出のテーマである。村田清風による「紙・蠟の専売制改革」と「越荷方の設置」をセットで押さえておきたい。

問 3 の元文金銀の鑄造については、徳川吉宗が低迷する米価の上昇・調整を意図していたという経済的背景の理解が求められた。

問 6 の一揆の同定と年表の組み合わせ問題は、2026 年度入試を意識した新傾向の形式であり、本年度の試験の中でも特に正答率が低く、学習の進度によって大きな差が生じた。

単に出来事の名称を覚えるだけでなく、それが「いつ」「どこで」「どのような背景で」起こったのかを、地図や年表を活用して多角的に整理しておくことが、名古屋大学入試突破への備えとなる。